

観光文化研究所所報 第10号発行によせて

観光文化研究所所長 小 池 明

本所報は今号で第10号となる。2002年の観光文化研究所設立より十年が経過して云はば節目の号を迎えた。この十年の間にも観光に就いては内外で様々な変化があった。それを取り巻く外的条件、即ち政治、経済、気象、そしてテロ、暴動などのネガティブな事件の勃発などが大きな影響を及ぼしたことは言うまでもないが、観光の内容、取り分け人々の行動形態も変化してきた。ここで「観光」の意義や我が国での変化を概観し、併せて当研究所の歩みやこれからの役割を再確認しておくことも必要であろう。

2002年観光文化研究所発足に伴い所報を毎年発行することとなり、2003年3月の創刊号以来、略々毎年3月に発行され、号を重ねてきた。その間、研究所設立の目的である「観光文化についての調査研究を行うとともに、ひろく地域文化の現状を把握し、観光文化の振興に寄与する研究ならびに活動を実践すること」に沿って、本学内外で様々な活動が為されてきた。観光に直接焦点を当てたものから、「観光」を媒介にしてより広く社会や文化を考察するというもの、更に、地域の観光事業振興に寄与するものなど多岐に亘っている。この所報にも地域研究を始め多彩な論文が掲載されている。それらが人々の観光や文化に対する考え方や見方を涵養することに役立ったことを信じて疑わない。

処で、創刊号には、観光旅行に対するニーチェの有名な所感が引用されている。ニーチェ自身は旅をする人であったが、観光旅行に就いては痛烈に批判し、否定的であった。併し時代は移る。現代はニーチェの時代よりはるかに世界各国・地域の相互依存、連環連鎖性が進み、互いに他国を無視して存在し得ない関係に在る。個人としても多様な価値観が容認されている。元来、国、地域、個人を問わず、相互の紐帯を築く

ためには相互理解が欠かせない。その相互理解の基を成す、それは矢張り百聞は一見に如かず、であろう。観光の意義のおおもとはそこにある。

蓋し、観光を語ることは異文化を語ることであり——異国間は勿論、同じ日本であっても土地、土地に固有の文化がある——、異文化を語る為には自らの文化、ふるさとの理解と愛情が不可欠である。一方、自らを知ることについて他を研究しその比較に於いて自らへの理解が進むということも言えるであろう。国際人という立場で外国人と付き合うには先づ母国のことを語れることが第一要件である。それらを含めて、旅、就中、観光というものへの人々の関わり方も当然変化し、その変化も今ではニーチェにさえ充分に理解してもらえるものであらうと私には思える。

昭和30年代半ば、高度成長のさなかに余暇の必要性がいわれるようになった。

レジャーブームという言葉が世に膾炙するようになり、日本人の余暇の過ごし方が見直されるきっかけになった。観光の為の旅行も大いに奨励されたものである。併し海外旅行が日本人にとって、語学などの壁はあるにせよ、様々な制約、制限から解放されて自由になったのは昭和40年代後半からといっても差し支えない。その頃までは外貨事情も与って商用によるものですら完全自由ではなかった。一方で、高度成長のただ中では「暇」ということ、暇な状態を罪悪視する風潮もあり、それが、現在はワークライフバランスやQOLが考慮され、寧ろそれが確かな価値観になりつつあるのを思うと隔世の感がある。それに伴い、余暇の過ごし方も大きな変化を遂げた。観光旅行のスタイルも個性的、ユニークさが求められ、集団、所謂パック旅行から個人の旅行へと変化しているのも流れとして自然である。

この十年間だけでも日本自体は固より、海外との関係に於いても更に変化している。国策としての観光事業の重要性も一層認識され、交通手段の進歩に加えてソフト面でも官民で組織作りや支援策が講じられてきた。真のGlobalization、国際化を促進する為にも当然のことである。併し、諸施策の効果が充分かというとまだまだ心許ない。特にアウトバウンドのみならずインバウンド、即ち我が国に観光客をもっと招致することが切望されるが、2500万人の外国人観光客を呼び込む目標に対して現状はその3分の1に留まっている。日本人が海外へ観光に赴くのが年間1600万人であるのに対してもその半分に過ぎない。我が国をもっと良く知ってもらう必要がある。

ここで東日本大震災に触れないわけにはいかない。震災直後から海外の多くのボランティアが我が国を助けにきてくれた。災害は洵に大きな不幸であるが、人間の本性の善なることを確認し、世界の人々と分かち合いができたことは救いであり、希望を捨てずに済むこととなった。

我が長野県は観光立県を標榜している。実際、自然の景観を始め観光資源に事欠かない。併し、ツーリストの立場で考えると折角の観光資源を生かし切れていないとの思いがある。ハード、ソフト両面での改善の余地は大きく、そのために地元の教育・研究機関としての本学が貢献できることは多々あると考える。その為にも観光文化研究所の責務は大きく、次の十年に向けての更なる発展に大いに期待する所以でもある。

顧みれば我が国には古来、旅を語る紀行文が数多存在し、それは又、優れた観光に関する著作でもある。往時、人々の移動、旅には様々な制約があった。又、危険を伴うものであった。旅先を漂いながら、故郷と那些人々を思う心情は当に切々たるものがあり、現代の我々にもその思いはストレートに伝わる。それこそ時代を超えて、である。

末尾に最近読了した本から引用をして、第10号の発行を記念したい。それは比較文明学の泰斗梅棹忠夫の残した膨大な資料を整理編纂した書物であり、その編者の解説である。

「空間の移動は、しばしば時間軸の移動をともなう。歴史のない場所はない。だから、大いに移動する人は、大いに考えることができる」